

岡山県製造業における付加価値構造の特質[※]

武 村 昌 介

I 序

岡山県の経済は、全国の経済ときわめて密接な関連をもって動いているといわれている。県内純生産でみた岡山県の産業構成をみると、第二次産業が38.6%を占める。これは、全国レベルに比し、ウェイトの高いものになっている(昭和56年)。就業者数でみると、第二次では、製造業がその75%を占めている(国調, 就業者数, 昭和50年)。岡山県では、昭和62年に瀬戸大橋が完成する。また、昭和65年までには、高速自動車の建設がかなり進捗していると予想される。こうした広域交通網の体系がほぼ出来上ることにより、岡山県の経済もさらに活性化をおび、県内・外ともに事業機会の拡大が確実に予測される。昭和65年には、岡山県の実質生産額は、約14兆円(昭和50年価格)と推定され、そのうちの約10兆円が第二次産業で生み出されると見込まれる。これは、昭和50年の実質生産額に比し、約2倍の大きさとなる。瀬戸大橋の供用および山陽自動車の延長の影響から生み出される潜在的生産額の増加の大きさは、約4,000億円と見込まれる。しかも、そのうちの7割弱が第二次産業の生産拡大によって寄与されるものと考えられる。そのうちでも、

※ 本論文は筆者が別のところで発表した『岡山県の製造業の現状分析』(中・四国の先進的文化経済都市をめざして——瀬戸大橋時代への対応——, 岡山商工会議所刊, 昭和57年11月所収第二部第一章)の内容の要約に、さらに新しい部分をつけ加えたものを、発行者の許可をえて発表するものである。

約9割が製造業によって生産拡大がおこるものである。⁽¹⁾これらの予測値は、重要な資料ではあるが、重要となるいくつかの客観的情報の中の一つとしてうけとめている。本稿では、製造業を主として取り上げ、それも、付加価値額の動向を主たるツールとして現状の比較分析を行ない、これからの時代のあるべき方向をさぐってみることを課題とする。

Ⅱ 岡山県製造業の地位

岡山県は、周知のように、昭和30年代高度成長の時代から昭和40年代にかけて、水島臨海工業地帯の開発によって、農業県から工業県へのイメージアップに成功し、生産額も飛躍的に成長した輝かしい歴史をもっている。その意味でいえば、水島は工業成長の文字どおりの立役者であった。しかし、40年代後半と50年代前半に勃発した2回にわたる石油危機をくぐりぬけた後は、きびしい石油資源制約を課せられ、水島基地の核である基礎素材型産業を中心に、かつてない深刻な再生問題をかかえ込むに至っている。しかし、それでも、昭和55年時点では、水島工業地帯の県全体に占める製造品出荷額等（以下『出荷額』と略記する）の割合は58.2%である。昭和50年から昭和55年までの、ウェイト推移をこまかく見ると、昭和53年からは、増加傾向ですらある。重化学工業が中心であることも変りはない。こうした水島地域の現実を見逃がすべきでないと同時に、80年代・90年代を見越した新たな対応もつけ加えていかねばならないのである。

岡山県の『出荷額』規模の全国順位は12位である。広島県が10位であり、香川県は20位にも入らない。また、中・四国ウェイトをみても、昭和54年時点で、岡山が24.0%、広島が27.1%、香川が7.9%である。また、中国ウェイトでみると、岡山が33.4%、広島が37.6%である。岡山と広島の間県で

(1) 『岡山県の地域発展に関する調査』Ⅳ章（岡山経済研究所他、昭和57年7月）

全国ウェイトの5%をこえる(5.5%)。山口県が全国ウェイト1.9%であるから、広島、岡山および山口の3県で、中国地域の、いわば『出荷額』でみた7%経済を維持しているのである。なお、香川の『出荷額』規模は、岡山の約3分の1であるにすぎない。広島と岡山の合計規模がちょうど兵庫の規模と同じ位、また、岡山と香川と兵庫の合計規模がちょうど大阪の規模と同じ位である。

事業所数や従業者数でみると、全国の動きは、事業所数のみ上昇傾向であるが、岡山県はどちらも減少してきている。

『出荷額』の指数推移(昭45=100)を3県比較してみると、岡山と香川の伸びがよく、昭和54年には、昭和45年に比し、3倍以上になっている。広島は全国なみの動きを示している(資料省略)。

岡山県の『出荷額』の類型別推移はどうか。ここに、類型別とは、次の業種別グループ分類をさす。類型Ⅰは、産業中分類番号26~27, 30~32(いわゆる基礎素材型)、類型Ⅱは、同分類番号34~37(いわゆる加工組立型)、類型Ⅲは、18・19~25, 28, 29, 39(いわゆる生活関連型)である。資料Ⅱ-1は、類型別Ⅰ, Ⅱ, Ⅲの指数推移(昭45=100)を示したものである。類型Ⅰの増大がやはり大きい。昭和45年に比し、約4.5倍の増加である。類型Ⅱは、昭和50年からの増大が目立っている。どの類型も全国水準を上回る推移を示していることが知られる。

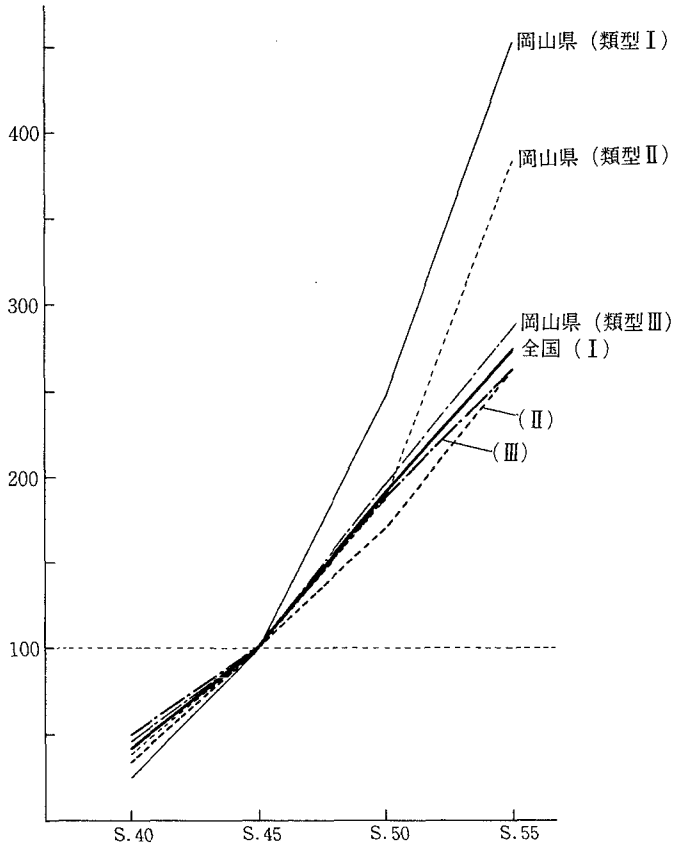
岡山県の『出荷額』規模の概観をえたが、次は、(粗)付加価値額(以下『付加価値』と略記する)の動向をみていくことにする。『付加価値』の方は『出荷額』から中間投入等⁽²⁾を差引いているため、付加価値創出力を測る適切な尺度となる。まず、資料Ⅱ-2をみられたい。岡山県の『付加価値』の中・四国ウェイトを『出荷額』のそれと比較する。次の事実がわかる。広島と香

(2) 付加価値額=生産額-原材料使用額等-内国消費税額-減価償却額。

粗付加価値額=製造品出荷額等-原材料使用額等-内国消費税額。

II-1 製造品出荷等の類型別の推移

(昭和45=100)



(出所) 工業統計調査結果表 (岡山県) 昭40～55より作成。

川は『出荷額』の当該ウェイトよりも、『付加価値』のウェイトの方が概して大きい。しかし、岡山は逆なのである。この傾向は、昭40年代からそうなのであり、その格差も大きい。これは、『出荷額』の規模に比べて、岡山県が、『付加価値』創出力を弱くしている一つの例証である。

Ⅱ-2 中四国，全国に占める岡山，広島，香川のウェイト
 (製造品出荷額等および粗付加価値額について)

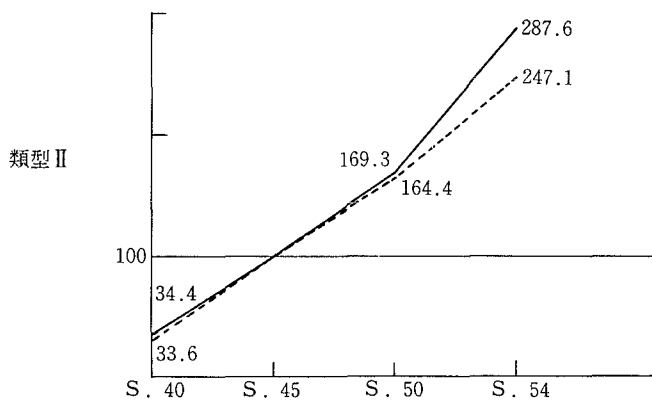
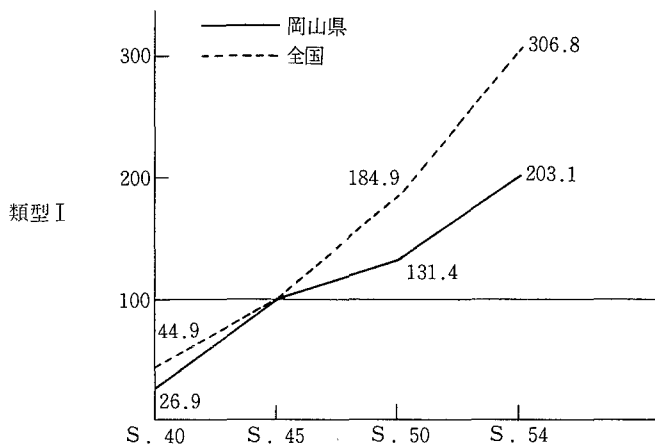
単位 (%)

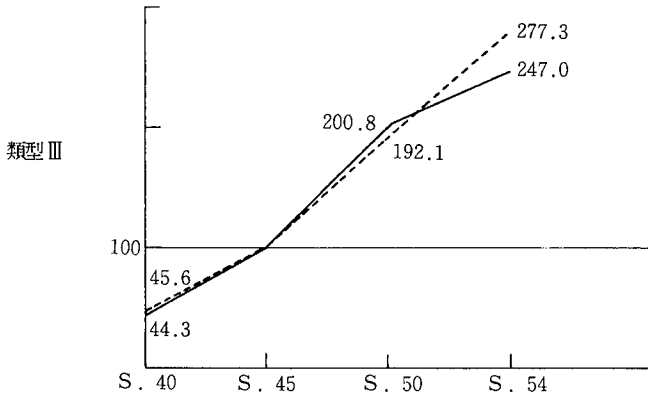
		岡 山			広 島			香 川		
		昭46	昭50	昭54	昭46	昭50	昭54	昭46	昭50	昭54
中・四国 ウェイト	製造業 出荷額 等	21.6	23.0	24.0	29.9	28.1	27.1	7.1	7.6	7.9
	粗付加 価値額	20.5	19.2	20.1	30.1	31.1	29.5	6.4	7.5	8.1
全 国 ウェイト	製造品 出荷額 等	2.2	2.6	2.6	3.0	3.2	2.9	0.7	0.9	0.8
	粗付加 価値額	2.0	1.9	1.9	2.9	3.1	2.8	0.6	0.9	0.8
中国ウェイト (岡山，広島)	製造品 出荷額 等	29.3	31.0	33.4	40.5	37.9	37.6	27.1	29.2	28.1
四国ウェイト (香川)	粗付加 価値額	28.0	26.6	27.9	41.3	43.1	40.9	23.8	26.9	28.9

(出所) 工業統計表『産業編』(昭46～54)より作成。

つぎに，3県と全国比較でみた，『付加価値』の動向をみてみる。資料Ⅱ-3は，岡山県の類型別の推移を示している(昭和45年=100)。岡山県は，類型Ⅱ，Ⅲはほぼ全国なみの推移を示している一方で，類型Ⅰの付加価値は，全国水準以下の推移を示している。岡山は，基礎素材型の付加価値創出力が，相対的に弱くなっているとみられる。やや詳しくみると，類型Ⅱは，昭和50年～54年において伸びが大きくなっている一方で，類型Ⅲは，近年伸びを落としているのが気になる。香川は，類型Ⅰ，Ⅱ，Ⅲともに全国水準を上回る推移を示している。広島は，類型Ⅲの伸びが比較的良好で，類型Ⅰ，Ⅱは，全国なみの動きといえる。他2県と比較しての，岡山県の類型別『付加価値』動向の特徴がでてきているといえる(香川，広島の資料は省略)。

Ⅱ-3 類型別付加価値額推移 (岡山県・全事業所)
(昭45=100)

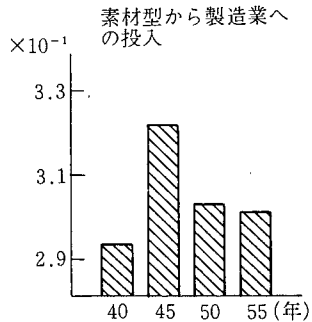
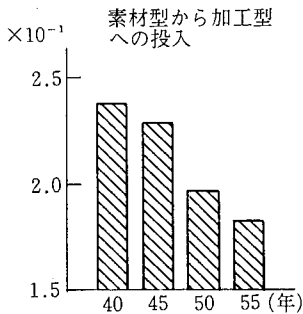


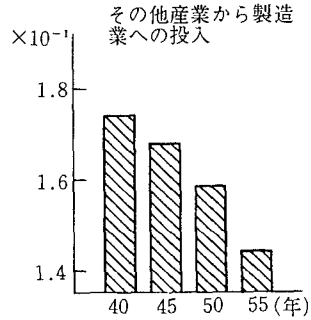
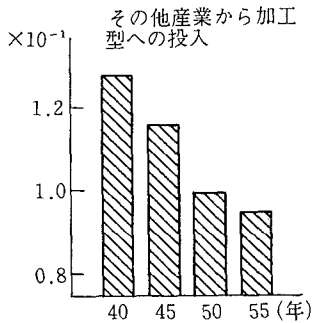
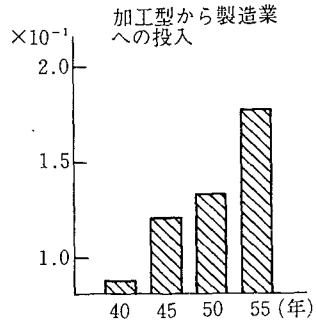
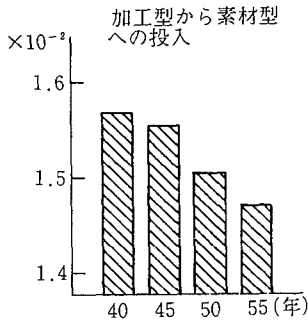


(出所) 工業統計表『産業編』昭40～54より作成。

資料Ⅱ－４は、3類型についての中間投入比率の推移を示したものである。これは全国についてのものであるが、地域についても同様な傾向があてはまるものとみられる。素材型と加工型との間の相互の投入は両方向ともに減退してきている。素材型から製造業への投入は、昭和45年をピークに減退している一方で、加工型から製造業への投入は、着実に増加していることが知られる。

Ⅱ－４ 中間投入比率の推移（製造業，全国）





(注) 中間投入比率は、中間投入額÷内生部門計である。

『石油・石炭』業種は、素材型でなく、その他産業に入っている。

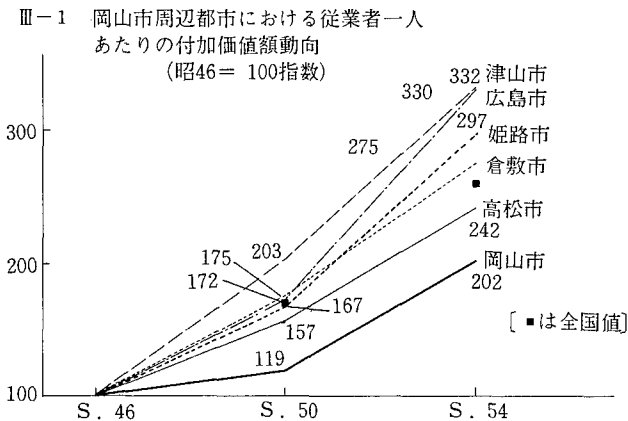
(出所) 『昭和57年度年次経済報告』第1部第1章第4節より一部引用。詳しくは、同資料を参照されたい。

Ⅲ 岡山市および近隣主要都市の付加価値生産性動向と特性

岡山市と近隣主要都市（倉敷市、津山市、姫路市、高松市および広島市）について「付加価値」の生産性動向を検討する。まず、岡山市の出荷額の規模は、高松市のその1.8倍、広島市の『出荷額』は、岡山市のその2.4倍（昭和54年）である。広島市のその規模と姫路市のそれとは大体よく似てい

る。倉敷市の『出荷額』の規模は、岡山市のそれと津山市のそれを合わせたものと大体同じ位である。『付加価値』で見ると、広島市は岡山市のちょうど2倍である。岡山市は高松市のちょうど2倍である（昭和54年）。岡山市は、『出荷額』規模と比較しての、『付加価値』規模では、高松市や広島市と比較して遜色はない。

さて、これら都市の、一従業者あたり（あるいは一事業所あたり）の付加価値額（あるいは製造品出荷額）の動向をみてみたい。資料Ⅲ-1をみられたい。掲載の資料は、従業者一人当たりでみた付加価値生産性の推移である（昭和46=100）。昭和46年を基準にした倍率で見れば、昭和54年時点比較では、津山市が一番上位にある。高松市は全国水準を下回るが、広島市は津山市に次いで上位で推移している。倉敷市は、昭和50年には、昭和46年比でみて2位の位置にあったが、昭和54年には、姫路市に次いで4位の位置にある。岡山市は、従業者一人当たりでみた、付加価値生産性も出荷額生産性も、一番の低位で推移している。しかし、付加価値生産性の実額については、他都市と比して、遜色は全くない。これが岡山市の大きな特徴といえる。



(出所) 工業統計表『市町村編』(昭46-54)より作成。

Ⅳ 岡山県の規模別付加価値生産性の動向

従業員数ではかった事業所の規模のちがいによって、『付加価値』の生産性にどの程度の格差を生み出しているかを調べてみることにする。すなわち、中小規模事業所（従業者数299人以下）の従業者一人あたりの『付加価値』が、大規模事業所（300人以上）のそれに比べて何%ほどのウェイトを占めているかをみるものである。なお、岡山県においても、大規模事業所は全事業所のうち0.5%しか占めない一方で、従業者数は28.5%、『出荷額』は59.6%を占めている（昭和54年）。『出荷額』のこのウェイトを岡山県は次第に増やしてきている（昭和53：58.4%、昭和54：59.6%、昭和55年：60.7%）。香川県も増えている。（昭和54年：41.8%、昭和55年：48.1%）。しかし、広島県は低下しているようである（昭和53年：59.0%、昭和54年：58.5%）。

さて、規模別でみたウェイト比であるが、資料Ⅳ—1をみられたい。岡山県は、昭和45年から昭和50年にかけて一旦下落し、昭和53年から昭和54年にかけて上昇している（44.9%から46.8%へ）のに比べて、広島県、山口県、全国計および中国計は下降している（広島：56.1%から52.1%へ、山口：48.2%から41.0%へ、全国：50.7%から47.2%へ、中国：49.2%から47.7%へ）。昭和54年時点にみる限り、岡山県はまだ全国水準よりも低い⁽³⁾。なお、岡山県の場合、中小規模の事業所の『付加価値』が、『付加価値』の総額に占めるウェイトは、53.8%（昭和54年）、54.6%（昭和55年）である。香川県は、69.7%（昭和54年）、62.8%（昭和55年）である。中小規模事業所の、総額に占める『付加価値』のウェイトが高（低）まる背景には、中小規模事業所の、大規模事業所に比しての、相対的にみた『付加価値』生産性の方が高（低）いという関係のあることが確かに認められる。ともあれ、中小規模事業所が『付加価値』生産性の向上のための努力が求められる。中小企業の付加価値創出力を相対

(3) 別計算によると、昭和55年時点で、岡山48.9%、香川31.4%の数字がえられた。岡山県はまた比率を上げ、香川県は比率を下げていることがわかった。

的に高め、大企業の付加価値創出力を相対的に低めるといふ、規模別の交代劇の進展に拍車をかけていくことが求められる。岡山県でいえば、中小企業の付加価値創出力の比較優位性が浮きぼりになってきているといえるが、決して楽観の許される状況にはない。

Ⅳ-1 大の従業者1人当たり年間付加価値額(A)と
 中小の従業者1人当たり年間付加価値額(B)との比率 $\frac{(B)}{(A)}$
 (%)

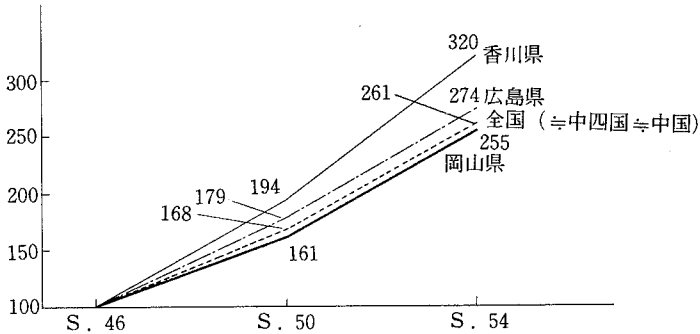
年 度	岡山県	広島県	山口県	中国計	全 国	四 国 計
昭和45	35.2	46.6	32.3	37.9	50.5	—
昭和50	58.3	56.5	48.8	52.4	54.8	—
昭和53	44.9	56.1	48.2	49.2	50.7	39.5
昭和54	46.8	52.1	41.0	47.7	47.2	41.6 ^(香川)
参考 昭和55	48.9	—	—	—	—	31.4 ^(香川)

(出所) 工業統計表、昭45～54；工業統計調査結果表
 (岡山県、昭55)；香川県の工業(昭55)より作成。

V 既存産業(地場企業含む)の高付加 価値化への胎動

まず、概観をうるために、3県および広域別でみた、従業者一人あたりの『付加価値』と『出荷額』生産性の動向をみておきたい(資料Ⅴ-1を参照)。『付加価値』の方を、昭和46年=100とした指数推移でみると、岡山県は一番低位にある。全国(≒中四国≒中国)水準よりも下位である。香川県は最上位の推移を示しており、広島県とともに全国水準の推移を上回っている。『出荷額』の方では、岡山県は、昭和54年時点で312であり、香川県(同304)、広島県(同272)、中国全体(同278)および中四国全体(同281)を大きく上回っており、やはりここでも岡山県の対照的な現実が浮きぼりにされている。

V-1 岡山県、香川県、広島県、全国、中・四国における
 従業者一人あたり付加価値額動向
 (昭46=100指数)



(出所) 工業統計表 (昭46~54) より作成。

各個別の業種別の付加価値生産性の現状を各県・各市についてみていくこととする。資料は省略している。昭和54年単年度の業種別についての考察であることに注意されたい。各県・各市のそれぞれの項目についての業種別第5位までの順位を観察してみる。付加価値の順位は、短期間のうちにもかなり変動する。

さて、問題としたいのは、付加価値生産性と出荷額生産性との、コンシステンシーである。全国では、付加価値順位と出荷額順位は、第5位順位までにみる限り、完全に整合性を保っている（順位が全く同じである）。県レベル比較でみると、広島・香川はコンシステンシーが良好である（第5位順位までに入る業種に整合性がある）一方で、岡山県は良くない。この同じ傾向は、市レベル比較においても同様である。こうした観察は、かなり恣意的かも知れないが、岡山県・市ともに出荷額の効率と付加価値の効率との対応の悪さが目立っているのである。

また、岡山県、岡山市とも、いわゆる地場産業業種が付加価値生産性の上

位グループに、大部分が入っていない。非鉄と出版・印刷とがその例外であるのみである。津山と姫路を除けば、加工組立業種である、一般機械、電気機械、輸送用機械は必ず上位グループに入っている。化学、石油・石炭、鉄鋼など典型的基礎素材業種は、必ず上位グループに入るものが殆んどである。食料品、木材、出版・印刷など生活関連業種では、上位グループに入るものは、全般的にみてまだ少ないとみななければならない。

これからの時代は、生産額のロットも大きく、かつ付加価値額のロットも大きいといった、かつての高度成長の時代とはちがう。多品種少量の時代とも象徴されるように、生産額のロットは小さくともよい。消費者のニーズが多様、複雑化していく中であっては、品種が多いことが求められる。付加価値額のみならず、その生産性のロットをできるだけ大きくしようとする時代なのである。付加価値の効率を高めていく努力を惜しまないことが、その商品の品質をおのずと高めていくことにもつながる。量の時代から質の時代に転換している。そうしたことは、低成長ないし安定成長の時代の要請にもマッチしている。高付加価値化への胎動は、もうすでに始まっている。付加価値を高める努力は、着実に実っていくものである。

製造業における産業中分類（16業種）の各業種のそれぞれについて従業者一人あたりの『出荷額』および同『付加価値』についての時系列指数推移の資料V-2, 3, 4をもとに、特化係数の動向も含めて検討してみた。なお、紙面の制約上、資料は、いくつかの業種（3類型より各1つづつ）をピックアップしたもの（食料品、化学、電気機械）だけを掲げていることを断っておきたい。

『出荷額』及び『付加価値』の時系列指数の業種別比較の検討の中から、少し大胆ではあるが、次の類型グループが一応浮び上ってきた。

(i) グループ：付加価値生産性、出荷額生産性ともに大きく、全国水準をゆうに上回る将来性ある業種。

〈出版・印刷、一般機械、電気機械、衣服（加工組立と生活関連が入って

いる)〉

(ii) グループ：付加価値生産性、出荷額生産性ともによく、全国水準からみても見劣りしない有望業種。

〈食料品，鉄鋼，輸送用機械，金属〉

(iii) グループ：より一層の付加価値創出力が望まれ、全国水準とも見劣りする業種。

〈木材，化学，非鉄，窯業・土石，精密機械，繊維〉

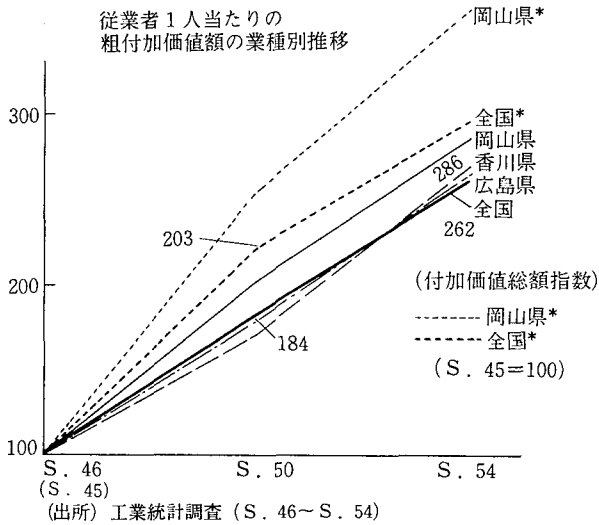
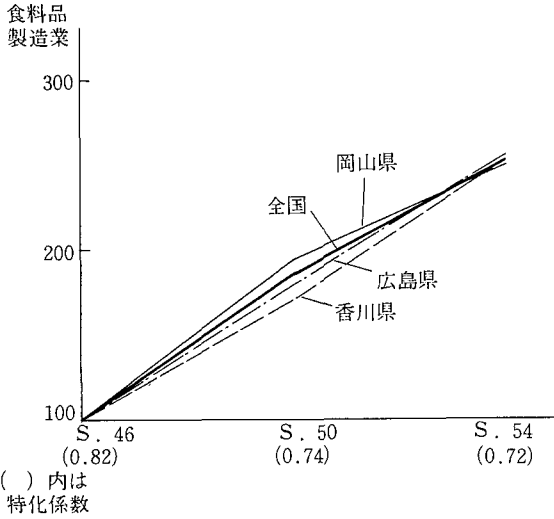
(iv) グループ：現状のままでは、付加価値創出力のきわめてむずかしい業種。

〈石油，家具〉

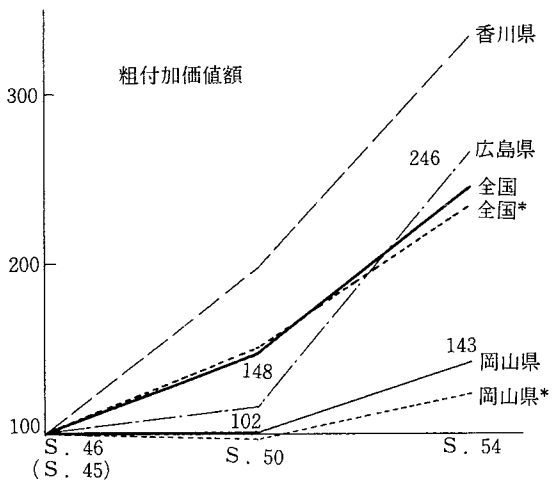
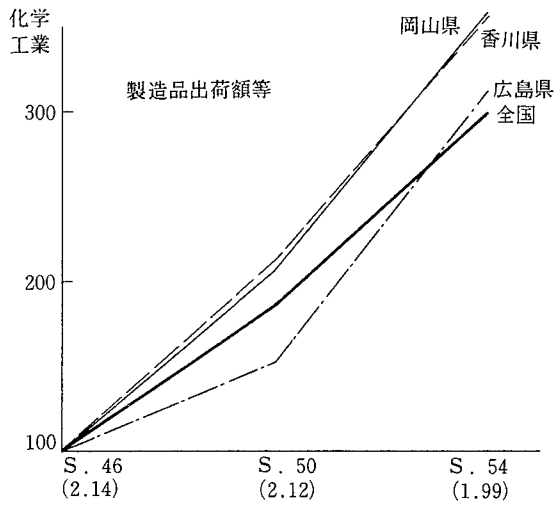
こうした分類は、主として付加価値生産性推移からみた、一試みであることに注意されたい。なお、特化係数 = $\left(\frac{\text{業種別県内構成比}}{\text{県の全国構成比}} \right)$ (『出荷額』, 昭和54年)について付言しておけば、岡山県では、衣服(3.46)、石油(3.40)、化学(1.99)、鉄鋼(1.71)が上位を占めている。衣服の特化がきわめて大きいのがわかる。特化係数は、大体において、加工組立型(一般機械、電気機械)で増加傾向にあることは認められるが、しかし、特化係数の増減と付加価値創出力(生産性)との間には、一般にはクリアーカットな相関はあまりみられないようである。

さて、これからの時代は、単独の業種や単独の企業が独力で乗り切っていくにはあまりに厳しい状況にある。大きな社会経済の環境変化が予想されるだけにそうである。そのために、同業種間では、共同開発(親会社、ユーザー、大学研究室および同業者)を促進、そのための人材育成の組織的運営が望まれる。また、異業種の間で互いに情報交換を行なう場を設けることが何よりも望まれる。いわゆる異業種交流である。これは全員参加では成功しない。有志参加が望まれるが、その組み合わせも一考してみるべきである。例えば、出荷額効率はあまりよくないが、付加価値効率の非常によい食料品業種と、出荷額効率は非常によいが付加価値効率がよくない木製品業種が出会っ

V-2 従業者1人当たりの製造品出荷額等の業種別推移
(S. 46=100)

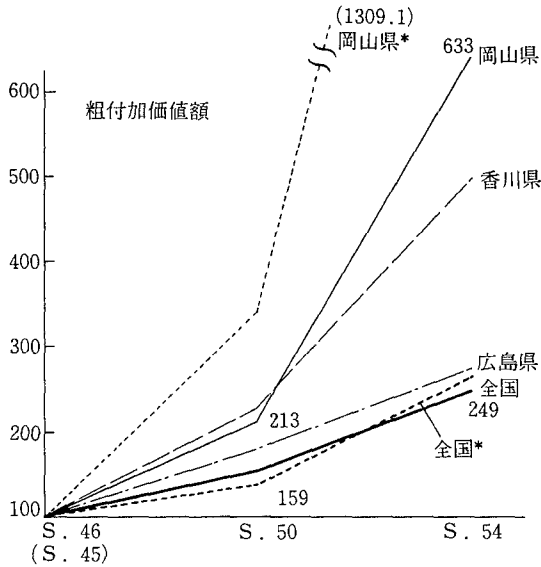
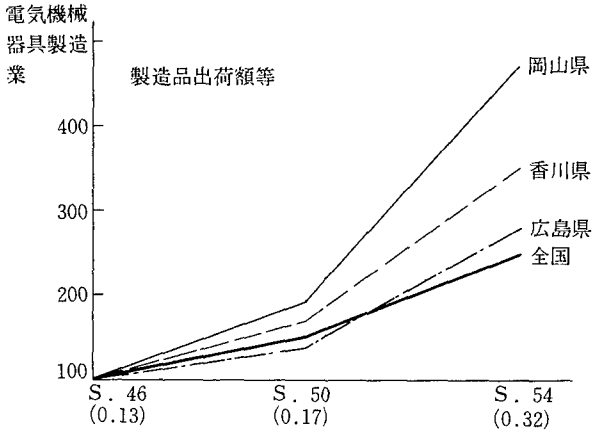


V-3 従業者1人当たりの業種別推移 (S. 46=100)



(出所) 資料V-2に同じ。

V-4 従業者1人当たりの業種別推移 (S. 46=100)



(出所) 資料V-2に同じ。

てみるのも一案かも知れぬ。こうした組み合わせは、他にも考えられる。異業種交流は、あくまで民間サイドがリーダーシップをとってやっていくこと、交流の成果を急がないこと、全員発言とすること及び学識経験者のアドバイザーをおくことなどが遵守されるのが望ましい。こうした異業種交流の試みがかなり成果を出している市も現にある(神戸商工会議所の Innovation Group など)。要は、民間サイドが、本気になってやっていく気が本当にあるかどうかが決め手となるのである。

VI 岡山県内市・郡部の付加価値生産性動 向と企業誘致の方向

まず、岡山県の製造業の『出荷額』の規模別でみた市町村分布について概観しておきたい。『出荷額』の分布は、県南に集中している。県中・県北では、津山市をはじめ、真庭郡、英田郡、新見市や高梁市が列を並べる。県南圏域では、一兆円をこえる倉敷市が全県の65%弱を占め、岡山市は12%弱でしかない。岡山市に次いで、玉野(4.9%)、総社(2.3%)、備前(2.2%)、井原(1.8%)、笠岡(1.7%)と続いている。

圏域別の『出荷額』の全県ウェイトについては、県南圏域の寄与率が、なんと9割(86.6%、昭和55年)にも達している。まさに県南に著しく偏向的な特質が明らかになる。事業所数、従業者数では、約6割を占めている(事業所:62.0%、従業者数66.4%、昭和55年)こともおのずとうなづける。

『付加価値』についてはどうであろうか。規模階層別にみた各市のグループ分けについては、『出荷額』の場合とさほど変ってはいない。やはり県南に集中しているのも変わらない。倉敷市がやはりトップで45.1%のシェアであるが、『出荷額』のシェアよりもかなり低いことがまず注目される。『付加価値』のシェアの方が、『出荷額』のシェアよりも良好なものは、岡山市の他に、玉野市、備前市、津山市、井原市、笠岡市など軒なみであり、総社

市もままよい。

圏域別にみた、『出荷額』の業種別ウェイトについてであるが、県南圏域では、化学分野主導型であり、東備や阿新は、窯業分野に、津山や英田は機械分野に、真庭は繊維にそれぞれ牽引力をもっていることが特徴的にうかがえる。

さて、業種別、地域別の岡山県内の『付加価値』、『出荷額』の一応の概観をえたので、次に、県内の各市・各郡について付加価値生産性（一従業者あたりと一事業所あたり）の状況を業種別とからめて検討してみることにし、合わせて立地動向との関連をさぐってみたい。まず、次の手順で表を作成する。岡山県内の10市・18郡について、市部別、郡部別ごとの『付加価値』の数字から、それぞれ一事業所あたり付加価値と一従業者あたり付加価値を算出する。次に、市部と郡部別に、一従業者あたりの付加価値順位をあらわす数と一事業所あたりの付加価値順位をあらわす数の合計を計算し、点数とする。もし、市部でも郡部でも同じ点数になるときは、一従業者あたりの付加価値の高い方を上位の総合順位とする。こうした手順で点数の優位の方から、市部又は郡部ごとに順位づけて、表とする。表と関連づけて、同時に、各市・各郡ごとの、一従業者あたり付加価値の高い業種の第1位から第3位までを調べることができる。

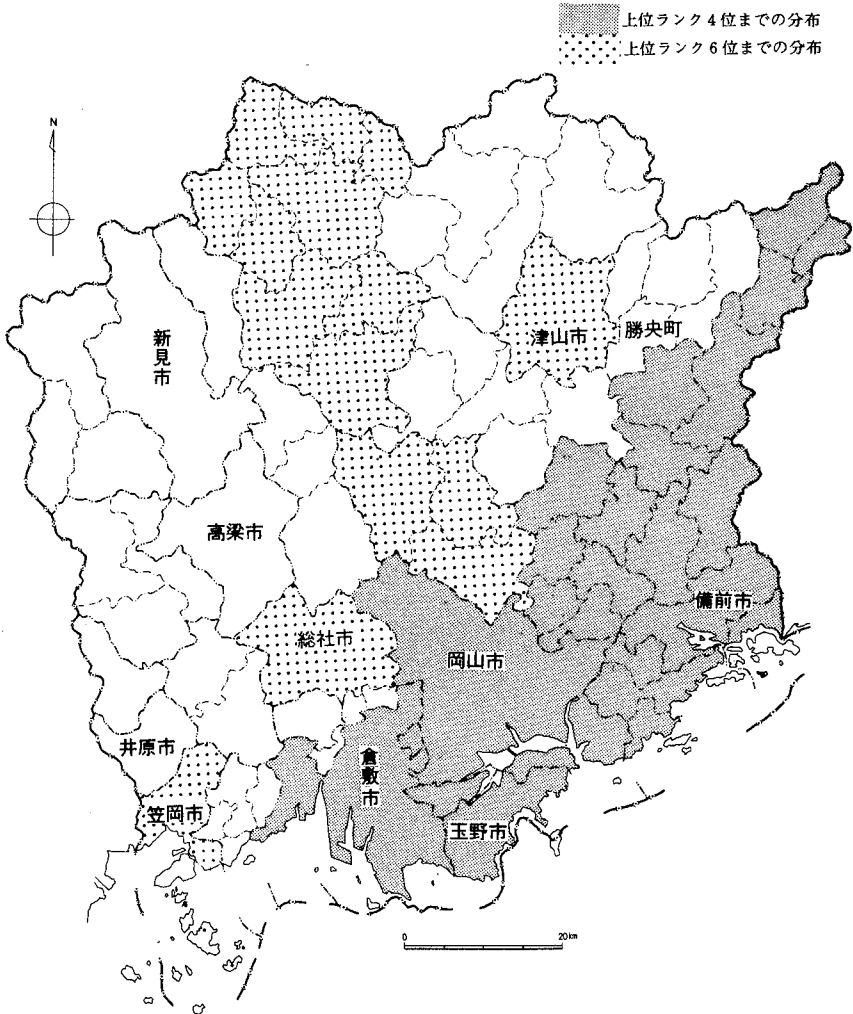
点数の値の10未満までをまずとってみる。市部では、倉敷市をトップに備前市、玉野市、岡山市の順で第4位までが入る。これら4市、4郡（町単位でなく、郡単位となっていることに注意）を、市別・郡別に境界の記された白地図に表示してみる（市、郡部の点数順位を示した資料は省略、分布地図は、資料Ⅵ-1を参照されたい）。

分布図は、県南と、県中・北部のなかの東部をつないだ、県地図の右側に偏った末広がり一つの連続した分布（濃くぬりつぶした部分）が得られることがわかる。次に順位を下げてみる。つまり、点数値を、15までとってみる。そうすると、市部では、第5位の総社市、第6位の笠岡市、第7位の津山市までが入る。郡部では、第6位の真庭郡、第7位の御津郡までが入る。

これらの結果を、さらに、白地図のぬりつぶしてみると、新しい分布図がえられる(淡くぬりつぶした部分)。県南では、総社と笠岡へ、つまり西の方に飛火していき、県北では、真庭、津山に飛火し、県中では御津といった方角に飛火していくのが読みとれる。県南では、倉敷市、岡山市をはじめとする諸市では、県南特有の地の利を生かした工業集積、都市機能および情報機能の集積効果が働いている結果であるが、県中から県北にかけては、英田、津山、真庭などは、明らかに京阪神に近いが、又は中国縦貫道の道路輸送の使益効果がかなり大きいとみなければならない。それにしても、付加価値生産性が、京阪神に近い県内、それも東部において高くなっている様相がみられ、さらに、県中・北の西部へと派及していくものとみられるのは興味ぶかい。さらにいえば、付加価値生産性のずばぬけて高い大手企業の立地があって、周辺に、関連下請企業が立地してしまうと、そこが拠点となり、面的に周辺へと派及していくスピルオーバー的経済外部効果もかなり大きいとみなければならない。なお、分布図において、県北部分では、津山が離れ島の存在となっている様相がおもしろいといえる。県中・北の西部が、付加価値生産性の層のうすいことも知られる。この事実は、今後の企業誘致を進めていく上に重要な資料と思われる。

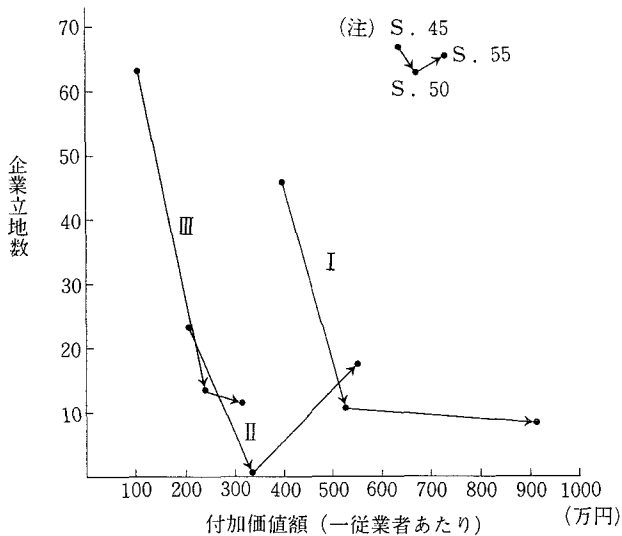
今後の企業立地、誘致の方向は、先端産業導入とのかわり、議論される必要がある。先端型について云々し、あたかもそれが唯一の生きる道であるかのように論を進めるのは、いささか片手落ちの感がする。加工組立に代表される先端型の繁栄も、在来的な素材型があってこそ、日の目をみたのであるからである。それでも、先端型産業の導入についての言を避けて通ることはできない。より先進的技術をもつ企業立地なり誘致を進めていくことが、地域発展の主たる起爆力になりうることは間違いないのである。雇用面や付加価値創出力面で、地場産業の活性化にも寄与して、その刺激効果も大きいことが期待できるからなのである。地場産業に寄与しえない、先端型の導入には慎重でなければならない。

VI-1 付加価値総合ランクによる分布図



また、類型別の、一従業者あたり付加価値額と企業立地数（昭和45年～50年～55年）との相関を示したグラフを掲げた（資料Ⅵ-2）。類型Ⅱのみが近年、右上がりの急勾配で推移することが読みとれる。立地動向との関連で参考に付したい。

Ⅵ-2 一従業者あたり付加価値額（類型別）と企業立地数
（昭45～昭50～昭55）



（出所）既出資料および県商工部資料。

最後に、その後の筆者の研究から、岡山県の製造業の付加価値構造の特質に関して新しくえた重要な fact findings について一言しておきたい。それは前出の資料Ⅳ-1ではえられなかったものである。昭和55年工業統計表（通産省）を用いて、4県（岡山、広島、香川、山口）と中国計および全国について当該比率指標の計算を、最新の数字データでもって行った。その結果は次の通りである。

VI-3 昭和55年度 $\frac{(B)}{(A)}$

(%)

	岡山県	広島県	山口県	香川県	中国計	全国
㊦	46.5	47.6	42.0	32.1	43.9	47.3
㊧	26.0	39.7	26.7	29.9	20.0	39.2

(注) ㊦は既出 $\frac{(B)}{(A)}$ ，なお㊧は『出荷額』についてみた同様の $\frac{(B)}{(A)}$ の値である。

(出所) 昭和55年工業統計表『産業編』昭和57年。

これにより、㊦でみると、55年時点でも岡山は広島、全国にまだ劣っていることを知るが、数字の趨勢からいくと、広島、全国を上回るのも近い。また岡山が中国計を上回ったのも明るい材料である。㊧でみた特徴としては、全国は㊦では横ばい、広島が㊦を下げるトレンドがある一方で、広島は㊧が他県に比し、全国レベルと同等に高い数値をとっている。岡山は㊦の比率に比し、㊧の比率が広島や全国と比較してみて、かなり小さいのが大きな特徴である。これは注目に値する。